

〈書評〉

スウェーデン統計局：ビルギッタ・ヘッドマン，フランチェスカ・ペルーチ，ペール・スンドストローム著，法政大学日本統計研究所：伊藤陽一，中野恭子，杉橋やよい，水野谷武志，芳賀寛訳

『女性と男性の統計論—変革の道具としてのジェンダー統計—』

(Engendering Statistics : A Tool for Change)

(梓出版社，1998年)

福 島 利 夫

はじめに

本書の原著は，1996年の末にスウェーデン統計局から出版されている。著者たちは，スウェーデン統計局のジェンダー統計の生産者であり助言者であるとともに，国連の諸機関とスウェーデン国際開発協力庁の支援によるアフリカ，アジア，ラテンアメリカ諸国でのジェンダー統計の技術顧問として第一線で活躍中である。

このような書物が生み出されたのは，1975年の国際女性年を画期とする近年の男女平等達成運動の世界的な高揚のなかからではあるが，それがほかならぬスウェーデンにおいてなされた背景についてまずふれておきたい。

スウェーデンといえば，ただちに「福祉」という言葉が連想される。また，女性にとっての生活環境が整備されていることでも有名である。さらに，国際社会において基本的人権を擁護し，開発途上国の経済的・社会的発展を援助するという積極的外交政策もあげられる。これら「福祉」・「女性」・「外交」を貫く共通のキーワードは「人権の擁護・拡大」である。その上に，スウェーデン人が実証主義的で統計好きであり，統計制度も古くから存在していたという事情が相まって本書成立の背景となったと考えられる。

さて本書は，1995年に北京で開かれた第4回世界女性会議で採択された行動綱領を大前提としている。そこでの最新の到達点は，各国政府等が政策を進展させて計画を実施するときに，社会的・文化的性差を明確にするジェンダー視角を主流におくこと（メインストリーミング）の実現である。統計の分野では，女性の状況を明

らかにするための「女性に関する統計」の必要性から出発したものが、男女両性の状況と関係を明らかにするための「女性と男性の統計」としての「ジェンダー統計」の必要性へと進展している。本書は、政府統計活動等においてジェンダー統計を「主流化」させるためのマニュアルであり、きわめて実践的な性格を備えている。ちなみに、原著の著者グループの性別構成は女性2名と男性1名であり、訳者グループは女性2名と男性3名である。

## I

内容を順に見ていこう。第1章「ジェンダー統計の生産過程の概観」は本書全体の要約である。まず、冒頭の1ページ全体を使って、本書が順に取りあつかうジェンダー統計の生産の種々の局面についてのフローチャートが示される。同じフローチャートが、以下の各章の冒頭でも欄外に小さくではあるが示されて、つねに全体のなかでの位置を明らかにしている。本章での強調点としては、まず統計の利用者と生産者の間の密接で継続的な協力が不可欠であることがあげられる。つぎに、ジェンダー視角がすべての伝統的統計分野において必要であることが述べられる。さらに、理想としては、国家統計局内にジェンダー統計のための特別の部署あるいは中心機関が置かれるべきだとする。

第2章「ジェンダー問題」は、取りあつかうべき主題としてのジェンダー問題とは何かを明らかにする。まず、生物学的性差としての性 (Sex) とは違って、ジェンダー (Gender) は社会的構築物である。また、ジェンダー問題 (Gender issues) は、女性と男性の生活のすべての側面および機会、資源へのアクセス、そして必要における男女の違いに関係する。

つぎに、「開発」(Development) 政策と女性運動の関係についてのアプローチの発展過程が展開される。はじめに、「開発における女性」(ウィドWID: Women in Development) アプローチの4つの型が紹介される。それらは、開発プロセスにおける女性への公正を達成するという「公正アプローチ」(Equity Approach)、貧困層の女性の生産性を上げるという「貧困撲滅アプローチ」(Poverty Approach)、女性を統合してより効率的な開発を行うという「効率アプローチ」(Efficiency Approach)、より強い自己信頼を通じて女性が力をつけるという「エンパワーメント・アプローチ」(Empowerment Approach) である。これらのうちで最後の「エンパワーメント・アプローチ」がごく最近のアプローチであり、ここでは女性を均質の集団としてみることは少なくなり、人種や階級、植民史、経済秩序における今日の地位によって女性の状況が異なる点が注目されている。そのうえで、

こうした「開発における女性」アプローチは女性だけを取りあげるなど、女性を周辺化する傾向があったことが指摘される。それに対する新しい「ジェンダーと開発」(ガドGAD: Gender and Development) アプローチの特徴は、男性との関係における女性、女性と男性の経済的・社会的状況、男女双方のより公正な発展などであり、社会全体をとらえて女性と男性の潜在能力をできるかぎり認識することを可能にする包括的なアプローチである。

それから、世界規模でのジェンダー問題が項目ごとに取りあげられる。それらは、意思決定、経済生活(労働力参加、農業、労働市場における不平等、インフォーマル・セクター、貧困、失業と不完全就業)、家族と世帯(女性世帯主世帯、世帯の大きさと構成、出産、家族の人数の選好、高齢者)、法律、健康(平均余命、病気および死因、子どもの健康、貧血、リプロダクティブ・ヘルス、生殖系感染症と性病、エイズ、健康管理の供給者)、暴力、教育(非識字、退学者、専攻分野、訓練プログラム、教員)、環境、人口分布・都市化および国内人口移動、人口移住および追放流民(難民)である。

最後に、各国での問題、課題と目標が掲げられる。機会均等のための国内計画では、具体例としてチリ、ナミビア、スウェーデン、フィリピン、EU(ヨーロッパ連合)があげられる。そして、国内のジェンダー問題、課題および目標の確認では、それぞれの課題についてその基礎にある原因を確認し、結果を評価することに注意がうながされる。

第3章「ジェンダー問題に関する統計と指標」は、まず社会におけるジェンダー問題を取りあげ、国内および国際的目標を達成し監視するためにジェンダー統計が必要であるという主張から始まる。つぎに、過去のアプローチとしての「女性に関する統計」と今日のアプローチとしての「ジェンダー統計」が対比され、一覧表でも示される。焦点は、「女性に関する統計の生産」から「ジェンダー問題をすべての統計の生産において主流にすること」への移行である。たとえば、「誰のために?」では、「女性擁護のための女性に関する統計」から「すべての政策立案者、企画者と一般国民のための、社会の全分野における女性と男性に関する統計」へ、そして「それは誰の責任か?」では、「女性担当本部機構/女性団体」から「政府統計機構」への移行である。最後に、生産されているかどうかや入手できるかどうかにかかわらず、必要とされる統計の認定を行う。

第4章「データの入手可能性と質」は、まずいろいろな理由によるデータの空白についてふれる。データが無い、あるいは入手できないか、または簡単には入手できないなどがあげられる。つぎに、データの質と信頼性の評価が重要である。誤差はデータ収集過程の異なる段階で生じうるので、誤差の源泉としてその内容を順に

点検する。それらは、サーベイの立案と企画、サーベイの宣伝、カバレッジの規定、調査のフレームの規定と標本設計、概念と定義の定式化、調査表の設計、調査対象時期の定義、調査員の選択と訓練、回答者の選定、結果の検査とコーディングである。これらのなかで、とくに出発点の立案と企画の重要性、そして概念と定義や調査表の用語の重要性が強調される。ジェンダー統計の生産の意義が、しばしば新しい考えや方法の開発にあるからである。

さらに、データの質の評価として、非標本誤差についての検討が続く。これも2つのタイプからなる。第1にサーベイの概念と実質的内容にかかわる誤差、第2にカバレッジと無回答にかかわる誤差である。

それから、概念、定義と分類について、いくつかの具体的な主題があげられる。それらは、世帯、世帯主、婚姻上の地位、安全な水の入手、経済活動、経済活動人口、経済的非活動人口、従業上の地位、失業、インフォーマル・セクター、インフォーマル・セクターでの就業人口、所得である。同じく、適切な方法が無いためと主題それ自体の複雑さとの両方による測定上の問題について、具体的な主題があげられる。それらは、世帯構成、乳児死亡、妊産婦死亡、安全な水へのアクセス、国内移民と国際移民、就学、有償労働と無償労働、生活時間、農業労働、資源へのアクセス、信用へのアクセス、個人所得と世帯所得、暴力である。これらが問題として取りあげられるのは、いくつかの概念や定義が女性が教育がなく、経済的役割を持たない主婦と見る、現実の歪んだ把握とステレオタイプにもとづいて発展してきたからであり、また女性は男性よりも測定がむずかしい状況の下にあることが多いからである。

第5章「ジェンダー統計の分析と提示」は、データでジェンダー差を明確に示す提示方法について論じる。一般にデータは、とくに統計に詳しくない利用者にはむずかしく、魅力的でない形で提示されたり、説明が不十分であったりする。本章では、統計を利用者に興味深く有益なものにするために、まず統計手法を紹介する。それらはデータのタイプ、絶対値と割合、比と比率、中心的傾向の尺度、散らばりの尺度である。つぎに、ジェンダー統計において興味深い諸指標をあげる。

そのうえで、表と図の作成の具体例に入る。第1に、統計の表示が、ジェンダーブラインド（ジェンダー差が見えない）ではなく、ジェンダーセンシティブ（ジェンダー差に敏感な）にもとづいて行われるように、表の作成方法の変化の過程をたどる。最初は、伝統的な統計の多くがとってきたジェンダーブラインドな方法として、女性と男性についての情報を伴わない、合計としての表示である。つぎに、とりあえず改善された方法として、女性だけの表示や合計と女性だけの表示が続く。しかし、これも不十分であって、比較を容易にするためには女性と男性を並べて表

示すべきである。そのさい、女性を男性よりも前に表示する。また、合計は省略してもよい。第2に、利用可能な詳細統計である「原データ」から、容易に理解できるジェンダー統計を作成することが提起される。そして、利用者にやさしい表や図の提示のための推奨事項を順に例をあげて説明する。

第6章「ジェンダー問題に関する統計出版物」は、まず各国の統計局などが生産している多くの定期的出版物の性格について、それらが通常は1つの統計分野に関してのものであり、主として専門家が使うものであると説明する。つぎに、それらと比べて、ジェンダー問題に関する統計出版物は、異なる統計分野と異なる出所からのデータを含んでおり、広い読者を対象にしている。そのために、利用者にやさしい、すなわち、簡単に理解できる言葉、明確な表、適切な書式と大きさが必要であり、一般に魅力的なものであるべきだとする。

具体的には、第1歩として、多数の読者に対しては、ごくわずかの基本的な指標と限られた文章だけからなる小冊子があげられる。さらに、そのさきの政策立案者などに対しては、統計や指標だけではなく、データの分析をとめない、多面的な文章も提供している、より包括的な出版物としてのジェンダー統計書が必要とされる。

最後に、ジェンダー統計出版物の準備過程の作業について、局面1「主題と関連統計の確認」から局面7「完成、出版物の販売と配布」にいたるステップが紹介される。

第7章「ジェンダー統計における訓練」は、第6章までの内容を素材として、ジェンダー統計の利用者と生産者のための訓練ワークショップを実施する時間割とガイドラインである。それは、1日およそ6～7時間の活動を5日間継続するというものである。

以上の本文の後に、「いっそうの読書のために」と「付録1：ジェンダー問題と開発について作業をしている機関」、「付録2：1995年北京行動綱領におけるジェンダー統計該当項目」、「付録3：ジェンダー問題に関する統計と指標（各国のジェンダー統計出版物の例）」と続く。さらに、「訳者あとがき」の次には、原著にはない「索引」が訳者によって独自に作成されている。

## II

本書の特徴と留意点について述べたい。第1に、ジェンダー統計論はジェンダー問題の解決を目的とするだけでなく、それ自身が「ジェンダー統計運動」として展開されており、二重の意味で運動論的性格が刻印されている。

第2に、統計の1つの分野としてジェンダー統計を設けるというのではなく、す

すべての分野でジェンダー視角を主流化するという清新な問題提起は、既存の統計制度と統計体系の全体を席卷するものとなることが期待される。

第3に、統計生産の全過程における利用者と生産者の協力を強調することは、近年プライバシーの主張や無関心な状態からくる「統計調査環境の悪化」が政府サイドから大きな問題として取りあげられていることについて、その解決の手がかりを与えるものである。「お上」である政府が、「下々」である一般国民を一方的に統計調査の対象としてのみ取りあつかうという一方通行の「お役所仕事」の枠内では、どうしても限界がある。そのままでは、統計は国民にとってよそよそしい存在とならざるをえない。すなわち、統計数値と統計行政からの一般国民の疎外である。双方向の交流こそが、その解決方法である。

第4に、統計の利用者にやさしいことである。専門家だけではなく、広い読者層を対象とするからには当然のことかもしれないが、本書ではその徹底のためにさまざまな工夫がなされている。たとえば、素人にも利用しやすくするためにはレイアウトも工夫されなければならないと説き、本書でそれを見ごとに適用している。具体的には、図表やまとめなどを大小さまざまなボックス（パネル）として表示する形式が多用されている。あたかもメモ用のポストイットの小片を自由自在にノートに貼り付けているかのようなのである。ただ、できればこれらのボックスのすべてに番号などをつけておいてほしかった。同じように、目次や本文で章だけに番号がついているが、これもさらに節や項についても番号などをつけるほうがわかりやすい。いずれにせよ、このように user-friendly（利用者にやさしい）統計をつくりだすことによって、統計の friendly-user（統計に親しむ人）をつくりだすことまでもが展望できれば最高である。

第5に、統計は何よりもまず、社会経済現象を認識し、変革するための道具であり、社会制度のなかで作りだされるものであることを本書は示している。このことは、従来の統計教育がとすれば数理計算の手法の紹介に偏りがちであり、結果として「統計ざらい」をつくりだすことにもなりかねないことへのアンチ・テーゼでもある。

もっとも、本書では数理的手法そのものについては、基礎的なものも含めてごく簡単にしか登場しない。見開き2ページだけで、先にあげたすべての項目を説明しようとする自体に無理がある。ここでは、数式を使わずに言葉だけで表現しようとしていることが裏目に出て、ものごとをかえってわかりにくくしてしまっている。利用者にやさしいためには、数式だけでは不十分であるが、同じように言葉だけでも不十分である。言葉も数式も両方ともが必要であるし、さらに求められるのは簡単な数値による例解やグラフによる表示である。これではじめて具体的なイメ

ージがつかめることになる。

たとえば「中心的傾向の尺度」では、まず統計集団の代表値としての「平均」という概念は、簡単すぎるようにみえるが実はそうではなく、「平均」にはいろいろなものがあるというところから始めなければならない。いわゆる常識的な理解としては、「平均」とは「相加平均」（算術平均）のことであるという、まさにステレオタイプ（固定観念）にとらわれていることに注意をうながしておきたい。つぎに、モード（最頻値）とメディアン（中位数）と相加平均値については、「位置上の平均」と呼ばれていることからしても、その位置上の違いはグラフでの表示が不可欠である。さらに、相加平均と相乗平均（幾何平均）と調和平均については、「計算的平均」と呼ばれているように、数式での表示と例解が必要である。

また、「散らばりの尺度」の「標準偏差」の例をあげてみると、尺度の1つである「分散」について本書は「平均からの偏差を2乗した値の平均」であるとだけ説明し、同じように「標準偏差」は「分散の平方根」と説明している。ここではやはり、以下の記号と数式を提示したうえで、その意味や使い方を説明するのなければ、利用者にやさしいとは言えないだろう。

$$\sigma = \sqrt{\frac{\sum(x-\bar{x})^2}{n}}$$

ただし、 $\sigma$ ：シグマ（標準偏差，ギリシャ語のシグマの小文字）

$\Sigma$ ：シグマ（総和記号，同上シグマの大文字）

$x$ ：個々の観測値（データの数値）

$\bar{x}$ ：観測値の相加平均

$n$ ：観測値の単位数（データのサイズ）

第6に、既存の統計制度と統計体系の全体を刷新するためにも、また統計利用上の注意点としても、統計の種類についての言及が必要であるが、不足している。全数調査と標本調査、調査統計と業務統計などのいくつかの区分についての説明が求められる。

第7に、ジェンダーに関する統計指標とそれをめぐるいっそうの議論としては、性別隔離指数やジェンダー関連開発指数などの紹介が必要であろう。まず、性別隔離指数は、産業や職業における就業率の性別による偏りを示す指数である。

つぎに、ジェンダー関連開発指数などについてももうすこし紹介しておきたい。国連開発計画の『ジェンダーと人間開発——人間開発報告書 1995』（日本語版，1996年）は、「ジェンダー開発指数」（GDI：Gender-related Development Index）

と「ジェンダー・エンパワーメント（社会進出）測定」（GEM: Gender Empowerment Measure）を提起した。いずれもジェンダー平等に関して、世界中の国に順位をつけたものである。

GDIは、人間開発指数（HDI: Human Development Index）と同じ3つの基本的側面とそれらを表す変数で達成度を測るが、男女間の達成度の格差を明らかにしたものである。基本的側面と変数は、寿命: 平均余命, 知識: 教育達成度（成人識字率と初等・中等・高等教育就学率）, 所得: 勤労所得の性別割合（ただし、HDIの場合では、生活水準: 1人当たり実質国内総生産）から構成されている。

また、GEMは、社会参加に焦点を絞り、政治経済への参加や政治経済面の意思決定の主な領域におけるジェンダー不平等を測定している。基本的側面と変数は、経済: 1人当たりの所得, 知的専門: 専門職, 技術専門職, 管理職に分類された仕事の占める割合, 政治: 国会で占める議席の割合から構成されている。

ちなみに、国連開発計画の『貧困と人間開発——人間開発報告書 1997』（日本語版, 1997年）によれば、1996年の日本の順位はGEM34位, GDI11位, HDI6位となっている。これに対し、スウェーデンの順位はGEM2位, GDI3位, HDI9位であり、GEMは1位から4位までを北欧諸国が占めている。

第8に、ジェンダー統計論は統計学のなかでも最新の分野である。そうであればこそ、そこでの試みは統計学一般にも有益である。本書は、ジェンダー統計を「主流化」させるためのマニュアルであるが、「訳者あとがき」では、「統計学一般のテキスト」としても優れていると評価している。その意味では、まさに異色のテキストである。

第9に、訳書の特徴についてふれる。原著には無い「索引」をつくるなど、いっそう利用者にやさしい工夫がなされている。訳書名を平易に「女性と男性の統計論」としたことも同様の趣旨である。ここで、訳語上の問題についてもあげておきたい。まず、「国民勘定体系（SNA）」は「国民経済計算体系（SNA）」または「国民経済計算（SNA）」と訳したほうがよい。「索引」の箇所では副次的な訳語としてカッコの中に「国民経済計算」という言葉も併記されているが、こちらを基本的な訳語とすべきである。つぎに、「ノルディック諸国」は「北欧諸国」と訳したほうがよい。もともと語源としては、「ノルディック」自体が「北方の」という意味であるが、訳語としては一般に通用しているわけではないので理解しにくい。本書の刊行自体もその1つであるが、ジェンダー問題とジェンダー統計において「北欧諸国」の果たす役割が大きいのでなおさらである。

最後に、ジェンダー統計の前提であるジェンダー問題の最新のアプローチとしては、WIDやGADからさらに環境問題を視野に入れた「女性と環境と開発」（W

ED : Women, Environment and Development) や「ジェンダーと環境と開発」  
(GED : Gender, Environment and Development) へと進んでいることを指摘  
しておこう。